

マラソンと日本の関わりにみる、アスリート像の変化の研究

A study of the alternation of figure of athlete -from the relationship between marathon

1K04B166

西川 潤

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 寒川恒夫先生

緒言

マラソンは、究極の個人の戦いである。国の戦いではない。しかし、世界大会では「日本の高橋」というように、競技者が何の為に戦っているかは無関係に、競技は世界の舞台では「日本のプレー」と称される。そう思ったときにふと「スポーツは誰のためにあるのか、選手は誰のために競技するのか」ということを考えた。私は、究極的に、競技は選手自身の為にあって欲しいと思っている。だが、一方で、早稲田の友人の活躍やオリンピックでの日本選手の活躍を見聞すると、なんとも言い知れぬ嬉しさや興奮を感じる。この背反する感覚は、個人主義と集団的アイデンティティとのバランスの在り方だと考える。そして、そのバランスの支点が個人主義側にシフトしてきているように思う。マラソン走者にとっての国とは何か、をナショナリズムがマラソン人生に影響がでた二人の競技者に注目し、「スポーツは誰のためにあるのか、選手は誰のために競技するのか」に一つの考えを提示したい。

第一章

マラソンとはその起源からして古代オリンピックの時代も、近代オリンピックの時代も国を背負った感動というものが常に付きまとっていた。一方、日本のマラソンもまたその起源、そして日本マラソンの父といわれる金栗四三からナショナリズムというものを意識したものであった。また、マラソンならではの、長時間、選手の苦しみが観衆に伝わる、という特徴は、苦しいときの精神の拠所としての「国」と結びつきやすい特性があるといえる。究極の個人種目であるマラソンが、ナショナリズムの影

響を受け、その競技者がその重みを背負う理由は十分にあったといえる。

第二章

1936年ベルリン五輪、日韓併合体制化での五輪にて、日本マラソン界待望の金メダリストが生まれる。孫基禎である。金メダルとった孫は日章旗抹消事件に代表されるナショナリズムのシンボルとして扱われるようになり、後年、マラソンを続けることも国家から規制された。生い立ち、マラソン中の感情、1936年の時代背景の検証から孫を検証しても、孫個人はただ走って勝たなかった、そして勝った、それだけだったと考えられる。確かに日朝両国から勝つことを期待されていてそれに応えたいとは思っていた。だが、それは日本の国威掲揚や朝鮮独立のシンボルとして勝ちたいという気持ちでは断じてなかった。

第三章

1964年東京五輪、孫以来のメダリストが誕生する。円谷幸吉、東京オリンピック当時24歳の自衛隊員であった。将来を期待されたアスリートが自らの手で競技生命だけでなく、自身の生命を絶ってしまった。その原因として、考えられる国の期待と抑圧を検証した。円谷には生い立ち、マラソン中の感情、コーチとの関係を検証して、円谷の責任感の強い性格が浮き上がってきた。また、自衛隊という特殊な環境と1964年の五輪が日本にとってどれ程国威掲揚の意味合いが強かったか、を検証して国家の期待と重圧が、円谷の性格を苦しめていた状況が伺えた。第二章同様に、円

谷本人の望んだマラソンと、国家や国民が望んだマラソンに生じた歪みが確認できる。

第四章

第二章、第三章で述べてきた五輪と比較して、アトランタ五輪、シドニー五輪での現代のマラソンを比較して今後競技者、スポーツはどうあるべきかについて、見解を述べる。アトランタ五輪で「自分で自分を褒めてあげたい」とコメントした有森裕子と、シドニー五輪で「自分のための金メダル」と

言った高橋尚子。この両者に共通するものは、「国のために」ではなく「自分の為」に走って、メダルを手にしたことを宣言したこと。そして、その個人の為の42. 195キロの戦いが国民に評価されたことだ。金メダルを獲得したが故に走ることを禁じられる、銅メダリストの重圧が選手を自殺に追い込む、そういった悲劇はもうあってはならない。新しい時代のスポーツは、「国」や「ナショナリズム」といったしがらみを越え、純粹に競技を「楽しんだ」選手が栄光を掴むようなものであって欲しい。